



令和 5 年度 第 3 号
[通 巻 1 3 6 号]
耶 麻 地 区 小 学 校 長 会
令 和 6 年 2 月 1 6 日

巻 頭 言



「令和に相応しい教育課程の創造を」

耶麻地区小学校長会副会長 喜多方市立第二小学校長 武藤 幸意

喜多方ラーメンが札幌、博多と並んで日本三大ラーメンの1つに数えられるようになりました。子どもの頃、東京から帰省した親戚が昼も晩もラーメン屋に足を運ぶ姿を見て、「東京のラーメンはそんなに不味いのか。ラーメンなどどこでもそれなりの味ではないのか」と不思議に思ったものでしたが、いつの間にか朝から観光客が後を絶たない街になったことは六十年近く住んできた者としてはとても感慨深いものです。

(二十代に食べた新宿のラーメンは確かに不味かった)

一方、喜多方ラーメンは醤油味がベースの平打ちの縮れ麺が基本であると思ってきましたが、昨今は、店によっては淡い塩味の味が徐々に増え、千差万別となってきました。時代やニーズの変化からかそれらに対応するように、ラーメンとしての本質は決して崩さず、個性的な形に変えたレシピが創られている。それは、まさに「その地域の人々、ニーズによって最もよい大衆食」を模索した結果なのでしょう。

それに比べて、毎年各校において、教育課程が創られています。自分の学校はもちろん、多くは、「学校名を変えさえすればどこでも使えるような教育課程」になっているのではないかと少々心配しています。5年ぶりの小学校勤務となりましたが、以前よりも学習指導要領では、より深く、より多くのことについて子ども達に身につくよう求めているように思えます。そのため、あれもこれも指導すべき事項はたくさんあるのですが、現状は、いろいろなものが中途半端な指導で終わっているように思えてなりません。さらに、スクラップされるはずだったも

のが、アフターコロナにより、以前のやり方を追い求める悪循環にもなっています。また、教員の世代交代により、多くの若い先生方が教壇に立っていますが、全ての教科指導や生徒指導についてベテランの先生方と同じ効果があるはずがないのに、指導時間も教材も時間配分も同じだから、同じ結果が期待されても、現実には効果があまりない。結果的に、「使えない教育課程」になっていないかと思えてなりません。

例えば、ある学校の教育課題が学力向上であるならば、ドリルタイムや活用問題に取り組む等の「学力向上のための教育課程を創る」程度の認識では、学力を上げる教育課程にはもうならないと思うのです。すべきことは、①教科・領域ごとの児童の学力課題を明確にする②課題克服に向けた職員の指導体制、教材研究の検討③検討結果を教育課程の形にして明示することではないかと思うのです。そのような計画の総合的な計画がその学校の教育課程となっていくべきであり、学校の数だけ、教材の系統のとらえ方、ICTの取り組み、研修の在り方、放課後のOJTの取り組み等も含めた別々の教育課程が出来上がってくるのではないのでしょうか。

働き方改革のためだけではなく、令和の時代にふさわしい学校全体のレベルアップのための教育課程をどう創っていくか、今、問われているものはそういうことではないかと思います。

アインシュタインの言葉に「同じことを繰り返しながら、違う結果を望むこと、それを狂気という。」という言葉があります。校長先生方、学校にありがちな「前例踏襲」は、見直していませんか？

～退職校長より～

「見える景色」

令和5年3月31日、夕方全ての業務を終了し校長としての役目を終了しました。涙がこぼれるのかなと思っていましたが、全く悲しさはなく、安堵感のみで「ほっとした」の一言です。この日はたまたま金曜日、新年度を迎えるのに2日間の余裕があるのは、ラッキーでした。1泊2日で、以前から予定していた温泉ホテルへ家族で出かけました。自分へのねぎらいと家族への感謝の思いで計画しました。

定年を迎えたら、すぐにやりたいことがありました。1つは現職時代に使用していた書類や家具・衣類等の処理、いわゆる断捨離です。

2つ目が、家を新築することです。これをセットで行うことによって、思い切った処理ができます。4月から今までの古い家の取り壊しをはじめました。10月末に無事引き渡しのある約半年間、少し不自由な生活にはりましたが、新居での生活は「快適」の一言です。現代建築は気密・断熱が特に優れているので、冬でもとてもあたたかいです。また、新築の家に今までの古い家具等を利用すると、新築の家に住んでいる感じが薄れるので、思い切って今までの物を処分することができました。2つのことをあわせてやれたのは、とても良かったと思いました。定年後は、できるだけストレスをためずに生活したかったので、自宅での生活が快適になるのはとても大切なことだと考えます。おかげで、毎日朝起きたときに幸せを実感しております。また、今までは自家用車を青空駐車しておりましたが、ガレージができたのも快適です。冬の朝、車の雪下ろしがないのはとても便利です。

4月からは、セカンドライフとして現職時代と同じ喜多方市内の塩川小学校で理科専科として働かせていただいております。今までとは違った立場での勤務です。やるかどうか迷いに迷った再任用でしたが、やって良かったとつくづく感じております。立場は教諭であります。管

前喜多方市立高郷小学校長 渡部 寿之
理職とは違った立場で学校を見させてもらっております。しかしいつも、校長先生や教頭先生のことを考えながら仕事に励んでおります。

さて、立場が変わると見える景色が全く変わるものです。今まで無我夢中で学校経営に取り組んできました。常に学校経営を考えながら組織として取り組み、判断・指示・解決してきました。現在、教諭としての立場で学校を見るとともに、問題が発生した時に「校長先生は何を考えているのかな。それを教職員は分かっているのかな。」といつも思っています。

今振り返りますと、校長職は孤独でした。校長室と職員室がこんなに近いのに、なぜ遠く感じるのか分かりませんでした。私が職員室に入ると、突然雰囲気が変わり校長をちらちら見ながらよそ行きの話し方をしてきます。それがとてもつまらなかったです。しかし、これらの教職員に囲まれてなんとか無事定年を迎えられたことに感謝の気持ちでいっぱいです。

どうかみなさん、健康な体と心をなんとか維持し、60歳を迎えられるように願うばかりです。きっと、その先には、今までとは違った穏やかで、潤いのある景色が待っております。



転出校長より

「会津の三泣き」そして

前 喜多方市立山都小学校長

現 矢祭町立矢祭中学校長 安部 孝

私は、会津に赴任したのが二回目で、「会津の三泣き」を会津若松市で体験しました。そして、二回目の山都町でも在籍中に失意、歓喜そして感動の涙を流しました。山都町の方々はとても教育熱心で、保護者や地域の方々から多くのことを学びました。そば打ち、磐梯山登山やスキー教室を初めて体験し、ワクワクした感情は忘れません。

小学校での勤務もとても勉強になりました。未成熟な中学生を成長させるのを仕事としていた自分が、低学年の児童に遊ばれ、おんぶや肩車を乱発する始末。無邪気な笑顔に虜になっている自分。町をあげて実施し、山都小の屋上で観た花火は一つ一つが綺麗で忘れられません。山都小の先生方からも多くの示唆を頂きました。学習面では小学校の先生方は、細部まで指導が行き届いています。だからこそ小学生たちの学力が定着するのだと感心しました。また、おやつタイムは必須でした。朝からずっと子ども達と一緒に疲れなわけありません。栄養を補給して残務整理や校務分掌等、次への活力にしていると理解しました。今でも恋しいのが、先生方が厚意で作って一緒に食べた数々の料理です。一年目は、不慣れなこともあり、地域の方々に迷惑をかけたこともありました。二年目はその反省を活かし、先生方の力を借りて学習や運動を活性化させることができました。

現在は雪がほとんど降らない矢祭町の生徒127名に、学習や部活動の頑張りを支援しています。特に部活動の支援には熱が入ってしまいます。喜多方市や山都小で学んだことを、学校経営に活かし、「矢祭の三泣き」になる位、必死に子ども達に向き合う先生方を育てていきたいと思っています。

最後に大場健哉前教育長さんをはじめ喜多方市教育委員会の皆様には大変お世話になり、紙面では収まりませんが感謝を申し上げます。また、耶麻地区校長会の皆様には温かく接して頂き、お力添え頂いたことに感謝を申し上げます。

学校経営あれこれ

「一つ一つの出会いを大切に」

喜多方市立加納小学校長 黒子 学

「喜多方市立加納小学校です。」

昨年度末、所属長から次年度の勤務地を聞かされた際「喜多方!？」という驚きと共に懐かしい思いが心にわいてきました。それは、30年程前になりますが、2年間講師として喜多方二小でお世話になった経験があったからです。当時は、福島国体成功へ向けて、福島県が丸一となって国体を盛り上げている時期で、運動会で「キビタン」の着ぐるみを着用して子ども達とダンスをしたことや国体の9人制バレーボールの会場として建設された大きな体育館で子ども達と一緒に遊んだことが今でもいい思い出となっています。また、右も左も分からない私に、校長先生、教頭先生を始めとして、たくさん先輩方が仕事の進め方や教師としてのあるべき姿を教えてくださいました。正直、採用試験になかなか受からず不安を抱えながら見知らぬ土地で働く日々を送る中、いつも優しく接してくださった先生方には、今でも感謝していますしその2年間の経験が先生方や保護者、子ども達と関わる際の基本となっています。

また、ある研修会に参加した時のことです。終了し、玄関に向かってしていると一人の青年が立ってこちらを見ていました。「えっ、何だろう?からまれたらいやだなあ。」と思いながら簡単な挨拶をして通り過ぎようとしたときに「黒子先生ですね。」と声をかけられました。私が喜二小で働いていたときの6年生で、現在教諭として働いており、私に影響を受けて教師の道を志したと話してくれました。社交辞令だったとは思いますが、気恥ずかしく、温かい気持ちになると同時に教師という仕事の重みと職責を改めて感じさせられました。

皆様にお世話になってもうすぐ1年になります。多くの人達に支えられ過ごすことができました。本当に校長会の皆様には、感謝してもしきれません。少しでも恩返しができるように、今後も出会いを大切にしながら、職務に励んでいきたいと思っています。

市町村・地区だより

豊川地区の未来を考えて

喜多方市立豊川小学校長 佐々木 豊

現在、学校を核とした地域づくりが求められています。では、地域や子ども達にはどんな課題があるのでしょうか。

もっとも深刻な課題は「人口減少」です。少子高齢化により、2040年には全国約1800市町村中896が消滅する恐れがあると言われています。豊川地区も例外ではなく、豊川小の児童数もこの20年間で半減しています(2002年237名→2023年101名)。このままでは豊川地区も、近い将来「消滅」に近い状態になるかもしれません。

また、子ども達が大人になる10~20年後は、コンピュータや人工知能の発達により、今ある仕事の半分が自動化されて無くなると言われています。65%もの子ども達が、今は存在していない職業に就くとも言われています。豊川地区で生活したくても仕事が無くなるかもしれません。

これらの課題を解決するには、自分の夢や目標もなく「とりあえず仕事がありそうだから都市部へ行ってみるか」という子を減らし、「様々な人と協力しながら、自分の夢中になれることに取り組み、自分の人生を自分で切り開いていく」という子を育てなければならないのではと考えました。イメージは「博士ちゃん」のような起業家です。

そこで、学校運営協議会で話し合い、CSの目指す子ども像を「地域の人と関わりながら、夢中になれることに挑戦する子ども」にしました。ここには「変化の激しい未来であっても、子ども達には主体的に生きてほしい」という願いと「地元に戻って地域のために尽くす人になってほしい」という願いが込められています。

目指す子ども像の実現に向け、CSの熟議等で話し合いを続けています。現在までの取組としては、「将来の夢」についての校長講話や講演会(ドローン操縦者、オペラ歌手、地元出身医師)等を行いました。今後は、地域に愛着を持つ子を育てるための取組も工夫していきたいと思います。これからも豊川地区と子ども達の将来を考えた働きかけを行いたいと思います。

市町村・地区だより

「ふるさとが好き」

喜多方市立高郷小学校長 片平 智幸

高郷町は、小学校、中学校が一つずつの地区である。当然子どもたちは小中学校の9年間で同じメンバーで過ごす。(こども園から数えると10年以上)高郷小に赴任して感じたことは、子どもたち同士の仲が良いことである。休み時間には、学年を問わず、一緒に楽しく遊ぶ姿が数多く見られる。小学生時代に感じることは少ないと思うが、大人になり、ふるさとを離れたときに振り返ると、地元にはたくさんの友達がいることに気付くはずである。

高郷地区には、地域の方という素晴らしい人材もいる。毎月、読み聞かせや昔話をしてくれるボランティアの方々、畑や田んぼの学習を支援する方々が子どもたちのために尽力してくださる。地域の方々が一体となって子どもたちの成長を支えてくれる。そんな温かい地区。

他にも、国体が実施されたボートの漕艇場があり、今でも、高校生の大会が開かれたり、スポーツ少年団の児童が活動したりしている自慢の施設である。



と、そこがみんなの思い出の地となるように、思いを込めながら植樹した。いつかこの場所での再会を夢見て。

私は、そんな高郷が大好きです。

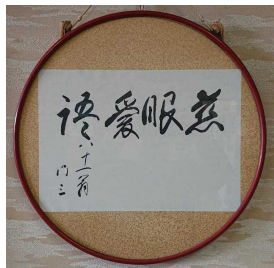


また、学校近くの雷神山に、卒業記念として植樹を毎年行っている。自分たちが植えた木が何十年後に立派になること

話の小窓

「慈眼愛語」

喜多方市立第三小学校長 河野 公寿



第三小学校の校長室の壁には丸い額縁が飾られています。その額縁の中には「慈眼愛語」という言葉と蓮沼門三先生のお名前が書かれています。

毎日眺めているにもかかわらず、その意味も知らないままではと思い、調べてみました。

慈眼愛語という言葉は仏教の「七施」からきている言葉だと思われます。「雑法藏經」というお経の中で、釈尊は「財力や知恵が無くても七施として、七つの施しができる」ことを教え示されているそうです。その七つの施しのうちの一つが、「眼施（慈眼施：じげんせ）」です。これは、慈（いつく）しみの眼（まなこ）、優しい眼差しですべてに接することを意味しています。もう一つが「愛語施：あいごせ（言辞施：ごんじせ）」です。これは、もの優しい言葉を使うことで、しかし、叱るときは厳しく、愛情こもった厳しさが必要であり、思いやりのこもった態度と言言葉を使うことだそうです。この二つの他、和顔施、捨身施、心慮施、壮座施、房舎施の五つで七施となります。

七施のうち、なぜこの二つの施しが掲げられているのか、意味を知ることによって分かったように思います。そして、改めて自分が子どもたちや職員、そして、保護者や地域の皆さんに優しい眼差しで、思いやりのある態度や言葉で接することができているか考えるよいきっかけになりました。

学校内では、校長の振る舞いや態度に意見してくれる方はなかなかいないと思います。ですから、なおのこと自分自身で自分の立ち居振る舞いや態度を常に振り返り直すことが大切だと思います。偉大な先達である蓮沼門三先生が掲げられた言葉に、これからも見守っていただきながら、子どもたちが元気に学校生活を送り、職員が生き生きと働くことができ、保護者にも信頼いただけるような学校経営を目指し、尽力していききたいと思います。

専門部経過・反省等

【研究部報告】

喜多方市立熊倉小学校長 前田 敬

本年度は、県の研究主題を踏まえ、3班編成による組織的・計画的な実践研究を軸として、2か年計画の2年次目として研究を進めました。各校とも、校長として「誰に対して」「どのような関わり」をしたのかを明確に意識しながら研究を進めることで、充実した共同研究を行うことができました。また、本年度は、会津大会において第3班が研究の成果を発表し、深まった協議につなげることができました。発表や運営に携わった皆様に感謝申し上げます。

○ 各研究班の成果（一部抜粋）

第1班「学校安全」

防災教育計画等の諸計画や各種マニュアルの確実な共通理解を図る機会をより多く設けることにより、全教職員が危機意識をもって職務に当たる意識を高めることができた。また、児童の実態、学校・家庭・地域の実情等を踏まえて毎年計画を見直し、実効性のある計画としていくことや教職員のみならず保護者や地域住民と共有することの必要性を再確認することができた。

第2班「社会との連携・協働」

保護者アンケートや学校運営協議会での協議を通して、目指す子ども像を作成することにより、家庭・地域の願いや思いを子ども像に取り入れることができた。また、周知方法を工夫することにより、学校と家庭・地域が協力し、どのような子どもを育てようとしているのか、保護者や地域に周知することができた。

第3班「経営、組織・運営」

各種調査や学校評価等から現状を分析したり、CS等を通して地域の願いを集約したりすることで、自校の課題をより明確にする機会となった。また、学校課題の話し合いの中で、自校や地域においてどのような子どもを育成したいかを話し合うことにより、自校や地域において育みたい資質・能力も明確になった。

専門部経過・反省等

【行財政部報告】

喜多方市立姥堂小学校長 後藤 洋一
会員の皆様の行財政部に係る各種調査へのご協力に心より御礼申し上げます。

調査結果の概略をご報告いたします。

【調査Ⅰ】教職員配置等に関する調査結果

耶麻地区の児童数は2368名(昨年度比28名減)実学級数は152学級(1学級減)です。加配・補正教職員数は本務者12名、講師8名で、児童支援1(1増)、通級指導1(増減0)、複式補正5(2増)、事務1(1増)、初任研1(1減)、特支軽減4(3増)、復興推進0(1減)、専科指導1(3減)、30人・30人程度3(2減)、その他3(外国語推進等)となっています。(令和5年5月1日現在)

【調査Ⅱ】教育施策の実施状況調査結果

通常学級で特別な支援を必要としている児童は耶麻地区で134名の5.9%(0.9%増)であり、県平均6.8%(0.6%増)より0.9ポイント低い現状ですが、県を上回る増加傾向となっています。また支援員の配置は、希望数26名中、25名が配置となっていますが、引き続き人的環境整備の要望を続けていく必要があります。

特別支援学級については在籍児童数が増加傾向で99名(7増)となり、特別支援学級担任の特別支援学校教諭免許状所有率は52.4%で県平均39.2%を大きく上回る現状です。採用試験の特別支援学級枠が導入されることで充実が期待され免許を有する教員の配置が強く望まれます。

専科指導加配配置なしの12校のうち、教科担任制を導入しているのは9校で、教頭や教務による分科指導や学級学年間による交換授業が取組の中心であり、専科指導加配の配置が課題となっています。

【特別調査】震災等の影響に係る調査結果

放射線教育は指導者のスキル不足が課題ですが、全学年で2時間以上実施している学校が多く、実施教科等については、「学級活動」を中心に、「社会科」「理科」「生活科」など教科横断的な展開も見られます。

県全体では、SSSの配置を希望したものの年度当初に未配置の学校が多く、今後耶麻地区でも厳しい状況が予想されます。

専門部経過・反省等

【生徒指導部報告】

北塩原村立さくら小学校長 富田 貴俊

耶麻地区の各校長先生方には、ご多用にもかかわらず、今年度の県生徒指導部調査へご協力いただき、誠にありがとうございました。調査Cにつきましては、半数調査となっており、今年度の該当になられた校長先生方には重ねて感謝申し上げます。

さて、今年度、県生徒指導部長会に参加させていただいた中で、11月の部長会の折に拝聴いたしました講演の内容について、本文にてご紹介させていただきますので、ご存知の部分も多いかと思いますが、確認の意味でご参考にしてください。

【演題】「特別な教育的支援を要する児童生徒の対応と校長の役割」

【講師】新潟大学教授 長澤 正樹 様

○多様な子ども達への対応

Universal Design for Learning(UDL) ～障害のある子どもを含む、全ての子どもが分かりやすく、参加できる学び(授業)～

- ・多様な学習者を対象に、学習環境のバリアを減らすこと。
- ・多様な教育方法(提示・意志表現・参加)の使用を認めること
- ・教科中心のカリキュラムで教えること。
- ・全ての子を対象として、授業を見直す。
- ・様々な方法や工夫を認める柔軟性。

○学習支援の基本

- ・学習への動機付け(興味関心)を高める。
- ・できることから始める。
- ・子どものペースに合わせ、繰り返し指導する。
- ・十分な時間を確保する。個別指導の保障。基準の変更。→授業の中で個別に教える。実態に合わせたグループ編成。家庭学習、宿題の変更(レベルに合わせる)補習など授業時間以外に時間を確保。通級指導教室や特別支援学級の活用。校内体制。

○校長の責務

- ・特別支援教育実施の責任者として自らが特別支援教育や障がいに関する認識を深めるとともに、リーダーシップを発揮しつつ体制整備を行い、組織として機能するよう教職員を指導する。
- ・特別支援教育に関する学校経営が特別な支援を要する子どもの将来に大きな影響を及ぼすことを深く自覚し、常に認識を新たにして取り組んでいくことが重要である。